

ディスカッション

●討論参加者

賀川 恵理香(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)／岡田 晃枝(東京大学)／

森 理恵(日本女子大学)／後藤 絵美(東京大学)／酒井 啓子(千葉大学)／帯谷 知可(京都大学)／

磯貝 真澄(京都外国語大学)／中村 朋美(関西大学)

●司会

和崎 聖日(中部大学)

和崎聖日(司会) それでは報告者のみなさんから、コメントと質問に対してご返答のほどをお願いします。

■先行研究がパルダを女性分離と捉えた社会的・歴史的背景

賀川恵理香 まず、後藤先生からの二つの質問に回答させていただきます。なぜ先行研究で分離の話が出てくるのか、イスラーム的法学上の話とはぜんぜん異なっているのではないかというご指摘ですが、私も最初にパルダを勉強しようと思ったときに、そこが一番ひっかかっていました。パキスタンに行くと、彼女たちはパルダをイスラームのものとして語るし、イスラームの意義付けをします。しかし研究書や論文を読むと、そこには「これは女性隔離のものだ」と書いてあります。

これはなぜだろうと考えると、パルダの研究が始まったのは1960年代や1970年代ですが、そのときには社会学の研究者たちがこぞって研究していて、社会において女性がどのような役割を担っているのかという性別役割の話がすごく出てきています。現地の女性たちがどのように意義付けているかというよりも、女性が社会でどのような役割を担っているのかという点で見ている。たとえば女性が家の中の仕事をしているとか、男性が公的な空間で生活をしているとか、そういうところをマクロな視点で見えています。だからパルダを女性隔離というか男女の分離の制度と捉えているのではないかと考えました。

最近の研究ですと、女性に対する聞き取りも行わ

れていて、女性がイスラームにおいてどのように意義付けているのかといったことも書かれていますが、やはり研究の前提に、パルダというものがヒンドゥー、南アジア全体にあって、女性を隔離するとか男女の分離ということが、宗教に関係ないところで前提となっている部分があるので、そういったものが強く表れているのではないかと考えています。回答になっているかわかりませんが。

■アバーヤの形態と用途の多様化における歴史的変遷の様相

賀川 もう一つ、時間軸で見たらどうなのかという点ですが、そこは私もすごく関心があります。1970年代後半のムハンマド・ジア＝ウル＝ハクのイスラーム化政策のときに、政府の職員やメディアに出てくる女性が頭の覆いを強制されたという背景があって、現在60歳代、70歳代ぐらいの女性と話をしても、その時代にヴェールを纏う女性たちがすごく増加していったという話は聞かれました。

そうしたかたちで、2008年に民政化してからずっと民政をしています。やはりイスラーム化の影響もかなり残っていて、ヴェールも増えています。ただし、それを単純にイスラーム復興として見ることはできないと感じています。なぜなら、一つは、アバーヤのデザインがすごく多様化してきています。また値段についても、普通にシンプルなものなら日本円で1,500円から2,000円で買えますが、先ほどお見せしたショッピングモールには8,000円ぐらいするア

バーヤが出てきていて、かなり装飾的なものが増えています。バーザールでも、1,500円のものもありますが、近年は3,000円ぐらいの少し高級なものが増えてきていて、ファッションとしてアバーヤを着るという側面も、かなり増えているのではないかと考えられます。ですから、単純にイスラーム復興として捉えることはできませんが、「アバーヤなどの多様化が起こっている」という言い方をするとすごく単純化してしまっていますが、そういう言い方ができると考えられます。

■ 南アジア的な文脈と

ヒンドゥーの文脈からみたバルダ

賀川 帯谷先生と酒井先生からありました、バルダが南アジア的な文脈ではどう語られるのかという点については、正直まだ分析が進んでいないところです。私が現在考えていることを申し上げると、南アジアの、しかもパキスタンの文脈というのは、やはりすごく混淆的な場所という感じがしています。と言いますのも、たとえばベシワールのバシュトゥーンの女性たちは、いわゆるブルカ、目のところに網が付いていて、上からかぶるというタイプのブルカを現在でも着ています。また、私が調査に入っているのはパンジャブの村ですが、そこでもかつてはそれを着ていたという女性たちもいて、そういったものが混じっています。

あとはヒンドゥーの文脈で申し上げると、ヒンドゥーの女性たちは夫よりも上の立場にいる男性の前では顔を覆いますが、親族男性以外の男性の前ではべつに顔を覆いません。夫を基準として考えるところがあります。現在はどうかわかりませんが、1960年ぐらいの文献では、ムスリムでもそういったかたちでしている人もいと述べられていて、かなり混淆的なところもあります。

もう一つ申し上げますと、私がパンジャブの農村に調査に行ったときに話を聞いた女性は、嫁いできた家がかなりバルダに厳しいので、基本的に家の中でも顔の覆いをしています。でも、彼女はある義弟の前では覆いをしていません。自分の夫の家族の前では覆いをしますので、義弟、夫の弟はしなくてはいけない存在なのですが、「この子は昔から知っているから、べつにしなくてもいい」といったかたちで関係性によって変わるということがわかりました。ですから、誰の前でどこを隠すのか、何で隠すのか

ど、そういった側面でかなり混淆的なところにあるのがバルダなのかなと、現在では感じています。

■ 単独インタビューとグループ・インタビューにおける回答行動の差

酒井先生からのご指摘があったインタビューのお話は、たしかにそうだと思って反省していて、今後は単独の話とグループの話で分けて考えたいと思いました。一つエピソードがあって、「大学内では脱いで、大学の外では着ます」というグループへのインタビューで話をしていたときに、ずっとアバーヤを着ている女性と、状況によって変えるという女性とが入り混じった空間で話をしていました。そのときに、「アバーヤってどんなものなの」と聞くと、変えるという女性4人ぐらいが「アバーヤをずっと着ている人は、わざわざ隠しているし、盗みとかを働くことがある」というネガティブなことを言い始めました。そうして話していると、変えないという1人は黙りこくってしまって、インタビューが終わったあとには泣き始めてしまいました。「なぜそんなにアバーヤを否定するようなことを言うのか」と喧嘩になってしまった場面があって、そこは私もすごく反省しました。やはりグループでインタビューする意味を、きちんと考えなくてはと思いました。

次に、男性がいても脱ぐのかという点ですが、男性がいる状態で脱いでいます。ただし、報告でも申し上げたとおり、男性がいる前でパッと脱ぐわけではなく、いないところ、コモンルームなどで脱いで出てくるというかたちです。

状況に応じて変わるという部分がおもしろくて、大学のキャンパスは道を挟んで分かれていて、道は公道なので物売りの男性などもあるんですね。そのあいだは30メートルぐらいですが、そこを歩くときには、ドゥパッターの裾をヒュッと上げて、気持ち頭に載せているみたいな状態で、べつに髪の毛が全部隠れているとかではなく、載せていることが重要というかたちで歩いているところも見るので、そこはおもしろいなと思います。

あと学歴についてですが、まだアクセスができていなくて、自分が入れるところが大学の寮なので高学歴女性を対象にしましたが、中ぐらいまたは低ぐらいの学歴の方にも今度は調査を進めていきたいと思っています。

和崎 ありがとうございます。続いて、岡田先生お

願いたします。

■ コイネックのトルクメニスタンへの導入過程とソ連期におけるイスラーム・ヴェールの扱い

岡田晃枝 コメントと質問をありがとうございます。まず後藤先生から、民族ごとにさまざまな衣装や装飾品があるなかで、どのようにして現在のかたちが決まったのかというお話がありました。実際に現在の制服になっているコイネック自体は、ものすごくゆるいものです。単に長いドレスであって、襟元には刺繍がある。先ほど写真で見ていただいたように、襟の形も何パターンもあって、自分で選べるようになっています。

生地に関しては、少しいい生地を強制的に導入したので、それが経済的負担になるのではないかとという海外のニュースがありました。しかし、それはとくにどこの民族のものを採用したということではなく、どこにでも共通するような、簡単な要素だけが出てきているのではないかと思います。もしかしたら、民族ごとにいくつか呼び名があったりしたのかもしれませんが、とにかく「ケテニ」という生地を使ったコイネックということ自体は、トルクメニスタンの全体にほぼ共通するようなものだったと理解しています。

帯谷先生からパラソルの話がありましたが、トルクメニスタンでも同じものがあって、「チュルプイ」と言いますが、それはソ連期の前までは使われていたようです。外に出るときには、それをかぶることになっていました。これを脱ぐことがどのようにソ連政府から奨励されたかといったら、ウズベキスタンとほぼ一緒だと思います。そのあたりのことは私の研究の対象外だったので見ていませんが、おそらく似たような闘争があったのだと思います。ウズベク人と違ってどのぐらいトルクメン人に脱がせるのが容易だったかについては、わからないところです。調べる機会があったら、ぜひ調べてみたいと思います。

■ トルクメニスタンにおけるイスラーム過激派への意識と対応

岡田 イスラーム過激派については、過激派の芽が出る前にすべて摘みとって追い出していますので、女性の服装によってそれを抑制することが必要かどうかについては、わからないところです。それ以上に政治犯の早い確保がなされます。とくに男性政治犯

が圧倒的に多いです。本当に政治犯なのか、それとも単に大統領が嫌いな人なのかわかりませんが、政治犯であろうという理由をつけられる人が出てきたら、即刑務所送りです。その意味で、イスラームの過激派が何か行動を起こすことはあまりありません。実際にものすごく平和というに変ですが、安定は揺らがないかたちにはなっています。

おそらくこれからも、イスラームの過激派がトルクメニスタンに入ってくることは、かなり難しいと思います。ものすごい警察国家で、ソ連時代を彷彿させるようなものがあります。その一方で、たとえば外国人に対する警戒などは徐々に弱まってきています。

学生を連れて現地に行く際に、3年ぐらい前までは、「私も学生寮に泊まりたい」と言ったら、「学生さんは泊まってもいいけど、先生は別のところに泊まって」と言われました。これから自分の考えを構築していく学生に、外国の知識人を接触させたくないという事情が背景としてあったようです。ところが翌年行くとそれがガラッと変わって、私も「学生寮の部屋に泊まってもいいよ」と言われました。部屋数が足りなくて結局は出たのですが、ですから、いろいろなことが変わってきて、どこでどう転んで、それが極端な私たちになるかは予測できないところがあります。

■ トルクメニスタンの国旗の緑と「装い」におけるトルコからの影響

岡田 最後に、酒井先生からの三つの質問についてです。国旗に関して、緑ではありますが——トルクメニスタンはイスラーム的な要素が、中央アジア5か国の中で強いかということ、おそらくそれはまったくないですね。

イスラーム教のいいところは吸収しようとしませんが、逆に集会は嫌いますし、先ほども言ったように、イスラームの過激派が入ってくることもものすごく嫌います。ですから、国民を敬虔なムスリムにしようという気は、おそらくないと思います。ですからトルクメニスタンの国旗が緑であることに「イスラームを謳う」という背景はありません。それよりも五つのマークが各地方を象徴するものであることと、2007年の改定であの下の国連のマークから採ったものが入れられたということが、彼らにとってはすごく自慢らしいので、そちらの話ばかりになってしまいます。

トルコの影響ですが、強くあります。ただし、コ

イネックに関することというよりは、いわゆる洋装の部分です。彼らはトルコに買い物に行っています。トルクメニスタンの国内でも、洋服は調達できますが、それよりもおしゃれなものを買いに行く先がトルコです。ですからトルコのファッションの影響は強くありますし、彼らの少し先、自分たちが少し背伸びして手に入れられるいい服がトルコにあるということは言えます。

そのなかでの考え方や、トルコの保守や政治などの行き来に関してですが、ここが連動しているかどうかについては、また別の話です。トルクメニスタンの体制にとって、トルコが利用できるもの、あるいは好意的なものと考えれば寄りますし、そうでなければ引く。ごく最近も、おそらくお金の支払いで揉めたのだと思いますが、トルコの建設会社を一つ追い出したりもしていますので、そのあたりトルクメニスタンはまた別の軸で、彼ら独自の軸で動いている可能性があることを言っておきたいと思います。

■ 外国人労働者の割合は多くなく

その影響は限定的

岡田 次に、レンティア国家としてのトルクメニスタンにおける外国人労働者の件です。たしかに下働きをする外国人労働者はいますが、その人たちと同じ仕事を、トルクメン人がまったくしていないかという、おそらく少し違うだろうと思います。多いのはインドの人です。トルクメン人が「あの人たちはインド人だ」と言っていたのでインド人だと思えますが、もしかしたらバングラデシュとかそのあたりの人かもしれません。見た目は南アジアらしい人が、道路建設などに若干従事しています。

ただし、ものすごく割合が多いわけでもないですし、道路建設や道路掃除にトルクメン人が従事しています。とくに道路掃除は普通にトルクメン人の人たちが、ものすごく出張っていますので、必ずしも、きっちり仕事そのものを分けて、コミュニティを分けているかどうかというのはわかりません。それよりも、トルコの建設会社や、欧米、とくにフランスの建設会社などが外国人労働者を連れてきて働かしているという側面のほうが、もしかしたら強い可能性があります。ですから、その人たちからの思想的・文化的な影響は基本ないです。それよりも、おしゃれのほうを目指すようなところがあります。

和崎 どうもありがとうございます。それでは森先

生よろしく申し上げます。

■ 日本人は何を着るべきか——

地域・時代・性別によって変化する洋装の位置づけ

森理恵 みなさまのお話がおもしろすぎて、自分への質問を忘れてしまうぐらい、すごく刺激になりました。パラレルに考えることがいいのかどうかわかりませんが、これまでまったく知らなかった国々のお話を聞いて、キモノのことを考えるヒントをたくさんいただきました。ありがとうございます。

お返事のほうですが、後藤先生と酒井先生のご質問は関係があったように思えるので、まずは帯谷先生の質問にお答えします。まずキモノ男子についてですが、インタビューはしたことがありません。あんまりしたくないような気も……。 (笑) アメリカ人の研究でもありましたけれども、キモノ愛好者の帯谷先生はどちらかわかりませんが、「日本が好き」というタイプのひと、日本とかはいつでもよくて洋服とは違うおしゃれを楽しみたいという二つに分かれるのかなという気はしていますが、わかりません。

最近が多いですね。私の勤務先は早稲田大学の近くで、早稲田には「わかものきもの会」というサークルがあって、うちの学生もそこに行っていたりするので、大学生のなかにそういう流れは多いですが、まだまったく研究は及んでおりません。

べつに聞かれてもいませんが、帯谷先生が見せてくださった、ウズベキスタンの女性が外出の時にかぶる袖がついた衣装は、韓国にも日本にもそっくりのものがあります。何か関係があるのでしょうか。

酒井啓子 アジアから来た可能性がありますよね。

帯谷知可 可能性がありますかね……。

酒井 韓国を通じて。

帯谷 いや、わかりません。

森 そこでアジア本質主義になってもなんなので……。韓国のものにすごく似ていて、日本にも似たようなものがあるので、余談になりました。

帯谷先生が他の方におっしゃっているコメントを聞きながら、キモノのことを考えたのですが、日本で国家的に女性に洋装が奨励された時期というのは、おそらくないですね。洋装から和装に戻ることはありました。徴兵制などが大きいと思いますが、男性には、「近代国家になるために洋服を着ろ」ということで、明治のはじめから洋装がすごく奨励されました。しかし、おそらく国が女性に対して「洋装をし

なさい」とか「断髪しなさい」ということは、日本ではなかったと思います（鉄漿や刺青の禁止はあった）。逆に「洋装する女性は生意気だ。やめなさい」とか、いまだったら大問題になることはありました。いまでもときどきありますけど。文部大臣が公式の場で「女性が洋服を着るのはけしからん」と言ったり、そういうことはちらほらありますが、おそらく洋装の奨励はなかったのかなと思います。

ただし、1945年を挟んだ時期に、「日本人が何を着るべきか」という議論はものすごくされています。1945年より前は、標準服や国民服の議論から始まって、「日本人は何を着たらいいんだ」みたいな、いまでは考えられないような、洋服にするのか、キモノにするのか、その折衷にするのかという議論がありました。たいてい折衷案が出てきますが、「何を着るべきか論争」のようなものが、役人から今和次郎のような人、花森安治のようなデザイナー系の人までいろいろ巻き込んでありました。

この論争は、戦後のアメリカの影響が強まるなかでも続いて、「日本人はやはりキモノ的なものを大事にしないといけないんじゃないか」という話もあって、民芸運動なども絡んで展開します。そういうことを考えるときに、日本だけで考えるのではなく、サウジアラビアの話などさまざまな地域の話が出ましたが、一緒に考えていくとおもしろいことがあるのかなと思いました。

■近代化のなかで、洋服を参照しつつ

多様な服が淘汰されて生まれた現代のキモノ

森 後藤先生からは、「キモノを通した関係性、キモノが周辺国をどのようにつないできたのか」というすごく難しいご質問をいただきました。「わあ、難しい」と思っていたら、そのあとで酒井先生が関係性についてご説明くださいました。よく見たら「関係性中心の融合型人文社会科学の確立」とあって、これだと思いました。キーワードなんですね。

私はこの概念をきちんとわかっていないと思うので、見当はずれかもしれませんが、まずキモノというのは、言葉の意味が変化したところでは、洋服があるからキモノがある。キモノだけで成り立っているわけではなく、洋服に対抗するものとしてのキモノという位置付けです。ですから、そもそも関係性のなかで生まれたのが現在のキモノです。

前近代には、「これが日本の服だ」などと思うこと

はなく、さまざまな服がありました。それが近代化のなかでだんだん淘汰されて、「これが日本の服だ」といって残ったものが、現在、成人式などで見かけるものです。あの形状のものが昔からずっとあったわけではなく、いろいろあるなかで洋服を参照しながら淘汰されて作り出されたものが現在のキモノであるという意味では、関係性のなかから生まれてきたと思います。そういう意味ではないのかもしれないですけど。

後藤絵美 おっしゃるとおりで、そのままです。

■多様な文化や要素が入り乱れる

混淆から生まれた現代アジアの「民族衣装」

森 周辺国をどのようにつなげてきたのかというのは難しい質問です。からゆきさんのことを出しましたが、からゆきさんのキモノについては別でも研究しています。東南アジアで最初にキモノを着たのは、からゆきさんたちだと私は考えています。彼女たちが着ていたキモノは、東南アジアのさまざまな服と混ざり合ったものです。そのキモノと、日本軍がインドネシアを占領したときに『ジャワ・バル』などに載せたキモノとは違います。日本軍が宣伝に使うキモノはオーセンティックなキモノで、作られたキモノ像ですが、現地のからゆきさんたちのキモノは、もっと混ざり合っているというか、混淆している文化としてのキモノです。現在ではそちらのほうは忘れ去られてしまって、オーセンティックだとみんなが勝手に思っているキモノだけが残っているので、見えなくなってしまっています。当時さまざまな国からセックスワーカーたちが東南アジアにたくさん来ていたわけですが、その人たちをファッションという観点から見てもおもしろいかなと思って、少し研究をしているところです。まだ答えは出ていないんですけど。

キモノではないですが、孫文が着ていた中山服、つまり日本で「人民服」と呼ばれるタイプの服（「中山」は孫文の号）については、日本の軍服が元になったとも言われるなど、いろいろ諸説入り乱れています。英語だと毛沢東が着ていたということで“Mao suit”と呼ばれています。少しずつ変わって行って、日本の軍服だったり、学生服だったり、現在でも中華人民共和国や朝鮮民主主義人民共和国では着られています。あれは何なのかという、それこそ関係性のなかで名前がいろいろあって、少しずつ形状が違っている。あ

まり関係ないことを言ってしまうと答えになっていませんが、東アジアにおける関係性といったときに、キモノよりも中山服が気になっています。

民族衣装というと、キモノ、チマチョゴリ、サリーなどと分けた世界になっていますが、実態を見ていくとグチャグチャに混ざり合っているの、そのあたりについて混ざり合ったままに見ていける切り口が必要なのかなと思いました。

酒井 中山服は、オリジナルはやはり日本ですか。

森 それは先ほどご紹介した『フェイクタイワン——偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』に、諸説あるなかの一つとして書いてあります(158ページ)。中国や台湾で研究がされているようですが、諸説あって、孫文が日本で日本の学生服を見て思いついたという人もいれば、ヨーロッパの何かが元になっているという人もいます。そうではない説を唱えている人もいろいろ、結局わかりません。

でも、あれは洋服ですよ。普通に思うアジア的な要素はまったくありませんが、中国の象徴みたいになっている。しかもレーニン服(中華人民共和国初期に女性に愛用されたとされる上着。人民服にベルトを着けたようなデザイン。ソ連兵の服装を真似たと言われ、ダブルボタンのものもある)とも混ざっているの、社会主義国の服みたいでもあります。社会主義も混ざりつつ、でも元は日本の軍服ではないかというように、まったくわけがわからない状態です。

酒井 統制されたモノということで、ものすごくリンクするような感じですね。

森 何か不思議な存在で、私も気にはなりつつ、なかなかわからない状態です。

■ 田舎で「刺すような視線を受ける」ことの

日本とパキスタンにおける意味の違い

和崎 ここからは、事実関係も含めながら、より踏み込んだ議論に移っていければと思います。いかがでしょうか。

森 議論が本格的になる前に、素人的な質問で申しわけありませんが、賀川さんにお聞きしたいと思います。まったく外れているかもしれませんが、田舎に行ったらジロジロ見られるというあたりのくぐりで、自分のことを思い出してしまいました。田舎の親戚のところに行くと、すごい田舎なので、普段の格好をしているとジロジロ見られて、浮いてしまう。だから田舎用の服を着ていくんですね。そういうことは

さまざまな場所であると思います。そういう「あるある」として捉えていいのか、それともパキスタン独特の何か、あるいはイスラーム独特の何かがあるのか、そこはいかがでしょうか。

賀川 ジロジロ見られることについては、たしかに日本でも、たとえば都市で着ているような少し奇抜なファッションを田舎に帰ったときにしていたら、すごく視線を集めることがあると思います。これはその場に合ったコードみたいなものがある、それに外れているとジロジロ見られたりする。どうお伝えしていいのかわかりませんが、私がパキスタンに行くと、すごく見られるんです。まなざしが、かなり刺すように見られる。

森 それは性的なものですか。

賀川 いや、性的ではなくても、女性も男性もけっこう見ます。中東を研究されている先生方なら説明がもう少しうまいかもしれませんが、「見てはいけない」というコードが日本では強くて、「あ、見られているな」と思ってパッと見たら目をそらしますよね。でもパキスタンだと、見合うみたいになる。(笑)

酒井 それはかぶっていても、ジロジロ見るわけですか。

賀川 かぶっていても、たとえば自分が外国人だとわかる状態だったらもっともよく見られて、かぶってサンングラスまでしていても——サンングラスをしているのも逆に少し浮いてしまうので、「ん？」と思われて、違和感を覚えたら、けっこう見ます。

森 かぶっている、かぶっていないと関係なくということですか。

賀川 そうですね。基本的に見られる状況があります。

森 そういう文化だということですか。

賀川 そうですね……文化と言ってもいいかわからないですが。

酒井 個別の事例になってしまいますが、かぶっていないとすごく見られますが、かぶると「見てはだめなんだ」という意識が向こうに働くので、少しそれが収まるというところはないですか。パキスタンの事例はそうじゃないですか。大学内ではかぶっていなかった人が、おっさんたちがいるようなモールに行くときにはかぶって、「かぶっているのに手を出すなよな」というメッセージになるということはないですか。

賀川 現地の方なら、おそらくすごく強いと思いますし、コードが働きやすいのですが、私は見た目も外

国人で、色などでわかるので……。さすがに全部を覆って、目なども見えない状況であれば「見られていない」という感覚は得ましたが、自分の感覚としては、あまり……。さすがにこういう髪型をしていたら見られますが、たとえば髪の毛を縛っていて、ある程度隠して、目までかぶっていても、見られる感じは一緒かなと思いました。

たしかに現地の方であれば、性的に見られているという感じがするのは、やはりかぶっていないときです。アパーヤを脱いでいるときなどに強いと言っているのが聞かれます。

森 それは日本で体験することとの違いは、程度の違いなのか、質の違いなのでしょう。

賀川 コードみたいな……そこも気になっているのですが、うまく言えないところです。私が日本に帰ってきてから友だちと歩いているときに、自転車に乗った男性がこちらを見ながら通り過ぎていったんです。私はパキスタンに長くいたので、「ああ、見ているな」というぐらいに思ったのですが、友だちは「いまのはすごく失礼じゃない」と言っていました。(笑)「見ることは失礼」、「見てはいけない」ということが、自分の経験ですが日本に暮らしているとありました。しかしパキスタンでは、たしかに「見てはいけない」とクルアーンにも書いてありますが、でも見ている。見るのがすごく強いという状態はあるかなと思います。何と言っているかわかりませんが、すみません。

後藤 地続きだと私は思います。日本だってかつては外国の人のことをジロジロ見ていたと言いますし。

森 だから、田舎へ行ってジロジロ見られるのも、よそものは見ている。自分たちの共同体内の人だったらジロジロ見るのはよくないけれども、よそものどこか知らないやつだったら、じっと穴が開くまで見てやるみたいな。(笑)やはり地続きなのかなという感じです。

後藤 私は地域で区切りたくない派なので。

森 すみません、あまり関係ないことで。ありがとうございます。

賀川 考えておきます。

■ 宗主国の影響による社会階層の温存と階層が異なる男性への警戒感の可能性

磯貝真澄 私も賀川さんにおうかがいしたいと思います。社会経済的な背景について、今後の課題として

と仰っているので、正確な情報をお尋ねする質問ではないのですが、ご報告を聞きながら、インフォーマントがどのような社会層の人たちなのか気になっていました。おそらくかなり上層の人たちだろうと思います。資金があるとか、地方社会における名士の家系であるとか、そういう人たちではないかと想像しました。

そのときに、彼女らは、大学生などの経済力がある程度知られている人のいるショッピングセンターなどに行けば、ヴェールやパルダを外しても問題ないけれども、市場などでは覆ったままでいるということですね。そうだとすると、これはひょっとしたらセンシティブな話かもしれませんが、社会階層が違う男性に対する警戒感の問題ではないのかと、私はお話をうかがいながら思っていました。可能性として、彼女らにそうした感覚があるのではないかと。

この想像とともに、ついでに思い出したのが、正確には記憶していないのですが、帝国論や帝国研究の分野で、宗主国のイギリスが階級社会だったために、イギリス領インド帝国では、階級といいますか、社会層のサインというものが、相当程度温存されてしまったという議論があったと思います。ひょっとすると、インドも含めてですが、かつてイギリスに統治されていた南アジア諸国では、伝統的な社会層の違いがかなり温存されており、上層の女性たちは、自分の社会層の男性たちには髪などを見せることができても、そうではない男性たちには警戒感を持ってしまっているのではないのでしょうか。今後研究を進められるということなので、現時点で印象として何かお持ちでしたら、お教えください。

■ 階層の違いに由来する意識よりも

「見られている」感覚が強い

賀川 まず経済階層ですが、インタビューをしていて、私も大学に通っているぐらいだからそれなりの経済力があるのかなと思ったのですが、「月にいくら稼いでいますか」とかいうことは聞いていなくて、「親御さんは何をされていますか」という質問で推測しようと思いました。印象としては、多岐にわたっていると感じました。農村でも、地主さんなど伝統的に階級として高かった人もいますし、農家の方もいたり、経済的にはかなり異なっていました。

それから、あまりここは詳しく言えませんが、政府から奨学金をもらえる制度があって、学費が返って

くるということもあって、とくに公立大学ですと、もともとそこまで学費が高くないうえにサポート制度があるので、大学に行っているからといって必ずしもエリート・クラスではないのではないかと感じていました。

大学とショッピングセンターでの男性に対しては外すけれども、バーザールにいるような男性の前では着けるというお話ですが、まさにおっしゃっていたように、なぜそんなに変わるのかと聞くと、「すごく見られるから」と言っていて、「じゃあ、なぜバーザールの男性は見るの」と聞くと、「彼らは教育程度が低いから」という説明をする女性はかなり多くいます。それは自分が高学歴であるという状態と、出身の家族的な背景もあるのかもしれませんが、語りとしては見受けられました。

ただし、もう少し具体的な文脈に落とし込んでいくと、「自分がいつも通っている大学の学部にいる男の子たちはすごく性的な目で見てくるから、それが嫌だから絶対大学にはアバーヤを着て行っている。でもバーザールではそんなにジロジロ見られていると感じないから脱いでいる」という女性もいました。その基準は、自分と同じ階層なのかどうかというよりは、「見られている」という感覚のほうが強く働いているのかなと感じていました。お答えになっていないかもしれませんが、すみません。

■「見られる」ことについて

未婚・既婚の差は存在しないのか

中村朋美 賀川さんにお聞きしたいのですが、インタビューを見ていると、未婚女性が大半で、年齢にはすごく幅があります。彼女たちは大学を出たあとに職には就いていますが、30代後半になっても大学にいて、未婚でいられるほどの経済力が持てるものなのかというのが一つ目の質問です。また、先ほどから視線の話をされていますが、未婚であるから強く反応するなど、未婚・既婚の差というのはないのでしょうか。既婚の方がすごく少ないのでデータとしては出てこないと思いますが、印象として何かあるかお聞きしたいと思います。

賀川 たとえば本調査の対象者の36歳の女性ですと、農村にある実家が学校を経営していて、帰ったらその先生か代表をやればいいという人です。そういった経済的な基盤がある人であることはたしかです。博士号を取っている女性のなかには、一度働いて

から仕事のrequirementのために取っているという人もいて、年齢が高い女性については、やはり仕事があるなどの前提条件はあるかなと感じました。

未婚と既婚の差については、私も気になっていますが、まだ調べられていません。彼女たちがどう見られているかはわかりませんが、既婚者と話しているときに、自分の服装を決める際には、自分の夫の意見がすごく大きいと言っていました。夫の両親がたとえば「もっとアバーヤを着なさい」と言ったとしても、「夫が『べつに着なくてもいいよ』と言ったら着なくていいんだ」と言っている女性にも会ったことがあります。その女性は農村から都市に出てきて都市で暮らしている女性ですが、「結局私は自分の好きなように着ている」と言っていました。

ですから、既婚になったときに、自分の人間関係がガラッと変わってしまう。誰と一緒に行動するかというものも変わってくるので、そういうところも含めてもっと検討していきたいと思います。

中村 彼女たちに以前のことについてもどうだったのかをきいたら、年代差や時代の変化もわかるかもしれませんね。

賀川 そうですね。ありがとうございました。

*

和崎 ご報告していただいたみなさま、コメンテーター役を務めていただいたみなさま、どうもありがとうございました。報告とディスカッションを聞いて、「装い」という鏡を通してさまざまなことが見られたという実感を私自身も持ちました。今日はお集りいただきまして、どうもありがとうございました。